豊玉町文化財調査報告書　第６集

クワバル古墳

１９９８

長崎県豊玉町教育委員会

クワバル古墳

――長崎県下県郡豊玉町所在の古墳時代の墓地――

1998

長崎県下県郡豊玉町教育委員会

発刊にあたって

――遺産を後世に伝え，残すために――

このたび，クワバル古墳に関する調査報告書を刊行することになりました。クワバル古墳は，曽から仁位に通じる町道を1.5kmほど行った所の，曽川中流の左岸にある山丘の端に位置しています。

この古墳は，昭和23（1948）年に東亜考古学会による調査が行われ，それまでは桑原蒙古塚遺跡と称されていたものが，古墳であることが確認されました。そして発見された石室からは，勾玉・管玉・ガラス玉のほか，金海式土器・土師器などが出土しています。

今回の調査は，町道の拡幅にともなうもので，平成９年の12月１日から５日まで事前調査を行い，さらに，平成10年５月11日から22日まで本調査を実施したものです。出土した遺物としては，陶質土器片が多く見られ，勾玉・鉄剣片・弥生土器片などがありました。これらを総合すると，豊玉町内，対馬島内に見られる岬に形成された墓地とは若干性格が異なり，川を中心に古くから開けていて，朝鮮半島との交易が行われていたものと思われます。

そこで，わたしたちは，このたいせつな遺産を後世に伝え，残すとともに，この調査報告書が，文化財の保護と学術研究に資することができれば，さいわいに存じます。

おわりに，直接，調査を担当いただいた長崎県文化課の方々，ご協力をいただいた関係者の皆さまに，深い敬意と謝意を表して，発刊のことばにかえさせていただきます。

平成１０年１０月３０日

豊玉町教育委員会　教育長

阿比留　　実

例　　言

1　本書は長崎県下県郡豊玉町大字曽字桑原の，町道仁位曽線道路改良工事に伴うクワバル古墳の発掘調査報告書である。

2　今回の調査は豊玉町教育委員会が調査主体となり，長崎県教育庁文化課が発掘調査を担当した。

3　調査期間は，前期の範囲確認調査を平成９年12月１日から同12月５日まで，後期の本調査を平成10年５月11日から同５月22日まで実施した。

4　本報告書の執筆にあたっては，各調査員で分担し，文末に執筆者名を記した。

5　本報告書に使用した写真は，調査中のものについては甲斐田および荒木により，また，遺物については文責者の撮影による。

6　本報告書に関係する遺物は，後日，豊玉町郷土館に収蔵・公開の予定である。

7　今回の調査関係者は以下のとおりである。

豊玉町教育委員会

教育長	阿比留　実
社会教育課長	佐伯　　勲（中央公民館長兼文化会館館長）
社会教育係長	原田　　賢
社会教育主事	村井　英哉
中央公民館主事	梅野　浩二

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事	甲斐田　彰（範囲確認調査）
文化財調査員	荒木　伸也（範囲確認調査・本調査）
係長	藤田　和裕（本調査）

8　調査協力者

豊玉町建設課土木建築係　原田武茂

梅野芳雄　梅野太志　梅野善弘（地権者）

中島忠儀　森谷等　梅野芳雄　平間俊彦　伊賀重二　平間利弥（発掘作業員）

9　本報告書の編集は藤田による。

本 文 目 次

Ⅰ　調査にいたる経緯……1

Ⅱ　クワバル古墳の位置と環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……3

Ⅲ　調　　査……5
　1　調査の概要……5
　・範囲確認調査……5
　・本調査……6
　2　埋葬主体部……7
　・１号石棺……7
　・２号石棺……8
　3　出土遺物……9
　・土器……9
　・土師器……9
　・陶質土器……9
　・勾玉……13
　・鉄製品……13
　・石器……15

Ⅳ　ま と め……16

挿 図 目 次

第１図　クワバル古墳実測図……1
第２図　対馬島の古墳時代の主な遺跡……3
第３図　クワバル古墳周辺の地形と遺跡位置図……4
第４図　試掘壙配置図……5
第５図　１号石棺実測図……7
第６図　２号石棺実測図……8
第７図　出土遺物実測図（土師器）……9
第８図　出土遺物実測図（陶質土器）……11
第９図　出土遺物実測図（勾玉）……14
第10図　出土遺物実測図（鉄器）……14
第11図　出土遺物実測図（石器）……15

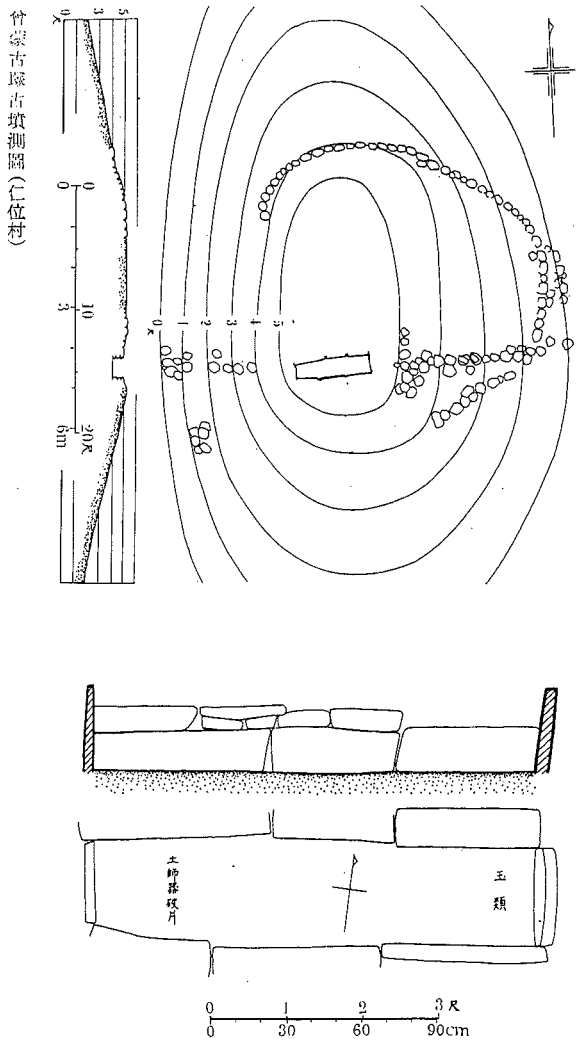
図 版 目 次

図版１　クワバル古墳遠景……21
図版２　クワバル古墳近景……22
図版３　クワバル古墳近景と調査風景……23
図版４　クワバル古墳１号石棺の状況……24
図版５　クワバル古墳２号石棺の状況……25
図版６　クワバル古墳２号石棺の調査状況……26
図版７　クワバル古墳２号石棺復原後の状況……27
図版８　クワバル古墳１号石棺と２号石棺……28
図版９　クワバル古墳出土遺物（土師器・陶質土器）……29
図版10　クワバル古墳出土遺物（陶質土器１）……30
図版11　クワバル古墳出土遺物（陶質土器２）……31
図版12　クワバル古墳出土遺物（鉄器）……32
図版13　クワバル古墳出土遺物（勾玉・石器）……33

Ⅰ　調査にいたる経緯

町道仁位曽線を曽浜より仁位方面へ1.5kmほど進むと，曽川中流の左岸に，川と直交するように突き出た丘陵がある。丘陵の先端部は過去数回の道路工事の際に幾度か削られており，道路からは露出した対州層群を見ることができる。この丘陵の頂上部に箱式石棺があり，以前から遺跡として知られてきた。長崎県遺跡地図には「クワバル古墳」として掲載されている。蒙古襲来とは関係ないのであるが，以前は「曽桑原蒙古塚」と呼ばれていた。対馬には「蒙古塚」と呼ばれる石塚が方々にある。クワバル古墳は昭和23（1948）年，東亜考古学会により調査かせおこなわれている。東亜考古学会は，「日本と大陸の間に位置し，文化や民族の交流に大きな役割を果たした対馬は真っ先に検討しなければならない問題をもっている。それは東亜の古代史を明らかにするために必要であるが，また玄海の絶島，対馬島内で営まれた人類の生活を跡づけるためにも必要である。」として，対馬の考古学的調査をおこなっている。

その調査報告『対馬』の中で，クワバル古墳を「積石円墳模：曽桑原蒙古塚」と報告している。曽桑原蒙古塚は，「曽（ソ）より仁位へ通ずる道路を約１キロ半すゝむと，その南側は山丘のはしに一基の古墳がある。径30センチばかりの野石をつんだ積石塚である。径約12メートル，その頂上に東西にながい箱式石室がある。室のながさ1.73メートル，はば43センチ，たかさ35センチ。東西の両壁，および南壁東端の一石は，いづれも板石をたてゝいる。ながい北壁は，下一段にあつさ20センチぐらいの角材を三石おき，そのうえに板石を小口づみにしている。南壁西半部も，また，これとおなじ手法である。すなはち板石と積石との石室である。ゆかは地山を利用し天井石はない。遺物は石室の東邊より曲玉２，管玉18，ガラス小玉２個がで，西邊より金海式および土師高坏片がでた。すなはち東を枕にして埋葬したことが推察される。」と報告されている。この古墳が平成７年度よりおこなわれている町道仁位曽線道路改良工事にかかるということで，平成９年12月１日～５日まで範囲確認調査がおこなわれた。（荒木）



第１図　クワバル古墳実測図（『對馬』より，原図の⅔）

＜引用・参考文献＞

水野清一編1953「第３章３　積石円墳(14) 曽桑原蒙古塚」『対馬』　東亜考古学叢刊乙種第６冊　東亜考古学会

II　クワバル古墳の位置と環境

1　地理的環境

本古墳は現在の行政区分では，長崎県下県郡豊玉町大字曽字桑原に位置する。対馬のほぼ中央の東海岸，曽浦の最奥部に注ぐ曽川に沿って1.5kmほど遡った場所である。曽川によって開析された谷間平地が川沿いに連なり，川の南岸にある古墳ののる丘陵上からはその状態が一望のもとに見渡せる。

対馬は日本海の西部にあり，北端の久ノ下崎で北緯34°42′，南端の神崎で34°05′，島のほぼ中央を129°20′の子午線が通っている。島の大きさは，南北約82km，東西約18km，面積およそ708㎢の細長い島である。北は朝鮮海峡（対馬西水道）を隔てて上対馬から釜山まで約49.5km，南は対馬東水道を挟んで壱岐島まで50kmほどある。対馬は壱岐とともに，日本と大陸とを結ぶ飛び石的な役割を果たし，政治的にも文化の交流の面でも，歴史の流れの中で重要な地位を占めていた。

対馬の地勢は，海岸は沈降と隆起によるリアス式海岸であり，その総延長は800km以上に及んでいる。また，陸地の87％が山林で，耕地として利用されているのは５％に満たない。険しい山々が連なり，島の南部にある矢立山が最高峰で標高648.5m を測る。島全体で200m から300m の山々が海岸まで迫り，厳しい景観を見せている。上対馬の御岳(標高479m)の頂上から南方を望めば，重畳とした山々の連なりを見ることができる。しかし，島を二分する浅茅湾は溺谷現象によって形成され，大小の入江や島々からなり，対馬の景勝地の第一とされている。

対馬はもともと一つの島であるが，浅茅湾と東海岸との間が二箇所で通じている。北側の万関瀬戸は1900（明治33）年，日清戦争後の軍事情勢や当時のロシアに備えた日本海軍が，湾内の軍港から直接島の東海岸に抜ける航路の必要性を感じて掘り切った水道である。その後，水深を深める工事も進められ，小艦艇の通行も可能となった。

南側の大船越の堀切りは，藩政時代，宗家中興の英主と謳われた21代の藩主，宗義真により計画され，1672（寛文12）年工事にかかり，同年６月下旬に第一期工事を完成させている。さらに第二期拡張工事を行い，第三期・第四期工事の結果，長さ２町13間，幅12～27間の水路を完成させた。

島全体が山がちの地形のため，多くの河川で河足が短く，ほとんどが傾斜の急な川となっている。島で最長の餌所川でも全長13kmを測るにすぎない。地層の傾斜は島の東海岸側が急で，西海岸は比較的緩やかになっている。このため背稜山地は東にかたより，沖積平野は佐護・仁田・仁位・小茂田など西海岸に多い。

地質的には島の大部分が第三紀の堆積岩で，対州層群とよばれる頁岩と砂岩の互層から成っており，これを貫いて火成岩が南部の高地を形成している。海流は暖流である対馬海流に囲まれた島であるが，大陸からの冷たい季節風のため冬季は冷え込むことも多い。

島で特徴的な動物相としては，ツシマヤマネコ・ツシマテンなどがあげられ，植物ではゲンカイツツジや，「なたおらし」「うみてらし」の異名をもつヒトツバタゴなどが知られている。

2　歴史的環境

「倭人は帯方郡の東南の大海の中にあり・・・倭の北岸にあたる狗邪韓国にいたる・・・はじめて一海を渡ること千余里，対馬国に至る・・・居るところ絶島，方四百余里ばかり，土地は山険しく森林多く，道は獣道の如し。千余戸有り。良田なく海物を食して自活し，舟にのり南北に市糴す・・・」『魏志』の「倭人伝」に伝える当時の様子である。対馬が歴史的に登場するのはこれが最初であるが，しばらく途絶え日本書紀に登場するまで時間がある。しかしこの間ただの沈黙ではなく徐々に力を蓄えていく過程を，島内の各地の遺跡の状況が示している。すなわち対馬での古墳時代で最も古いとされる西海岸の大将軍山古墳や東海岸のコフノ隈遺跡，朝日山遺跡，それに本クワバル古墳などが考えられる。墳丘をもたない墳墓が各地に営まれていたが，４世紀にいたって浅茅湾最奥部の東海岸側，雞知川河口に近い山腹に前方後円墳（前方後方墳）を築く勢力が出現した。出居塚古墳（鶴ノ山古墳）で，対馬で最古の高塚式の古墳とされ，出土した柳葉式の銅鏃から４世紀の後半に築造されたと考えられている。在地の首長層で，畿内の勢力と結んだ人物の古墳である可能性が強い。また雞知浦の北側の岬の上に営まれた根曽古墳群は６基の古墳で構成され，そのうち３基が前方後円墳である。

これらの他に，高塚式の古墳としては雞知浦に面するサイノヤマ古墳が知られている。横穴式石室をもつ古墳であるが，詳細については不明である。

また，島の西海岸，佐須川河口に近い丘陵上に矢立山古墳がある。横穴式石室をもつ古墳であるが，石室の構築の仕方や形態に特徴的な面が認められる。対馬南端に近い豆酘には保床山古墳があるが，石室の構造や出土の遺物などから，矢立山古墳とのつながりも考えられている。系統的には浅茅湾周辺のものとは別系統のものの可能性が大きい。

次にクワバル古墳周辺の遺跡についてであるが，第３図１は深入遺跡で，弥生時代の墳墓である。２はエーガ崎遺跡で，これも弥生時代の墳墓である。現在，小さな岬の上に石棺が１基のみ残っている。東亜考古学会の調査で，櫛住吉神社の伝世品と報告されている前漢鏡と細形銅剣は，櫛のエーガ崎の古墳から出土したものと伝えられている。３は銭島遺跡で，現在は消滅したが弥生時代の墳墓であったといわれている。４は櫛のサエ遺跡で，古墳時代の墳墓である。５は松山遺跡で，これも弥生時代の墳墓である。６は観音鼻と呼ばれる岬

1　大将軍山古墳　　2　コフノ隈遺跡
3　朝日山遺跡　　4　トウトゴ山遺跡
5　恵比須山遺跡　　6　クワバル古墳
7　出居塚古墳　　8　根曽古墳群
9　矢立山古墳群　　10　保床山古墳

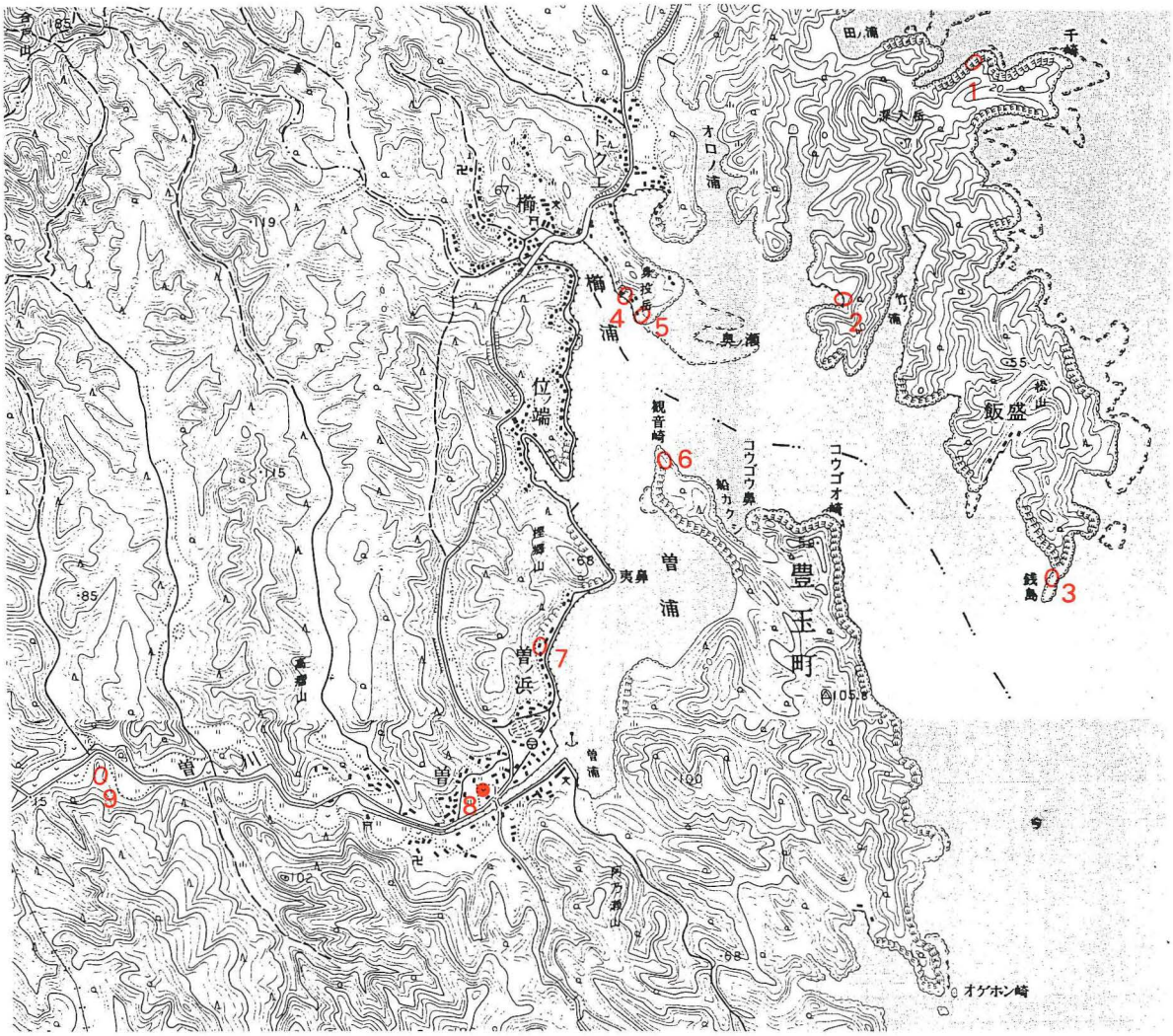
第２図　対馬島の古墳時代の主な遺跡

の先端部に位置する遺跡で，古墳時代の組合せ式の石棺が4基知られている。7は住吉平貝塚で，縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての貝塚である。曽浦に面した海岸の，標高10～15mほどの場所に位置している。8は輪島古墳とされ，曽浦の奥に位置するとされているが，現況では不明な点が多い。9が本書で報告のクワバル古墳である。

第3図としてクワバル古墳周辺の遺跡をあげているが，数量的には僅かである。対馬は国内第三位の大きさの島であるが，そのうちでも特に高塚式の古墳は驚くほど少ない。全島で墳丘をもつ古墳として知られているのは10基ほどしかない。地形的に耕作のできる空間が限られ，古墳を造ることによって貴重な平坦地をつぶすことを嫌ったものと思われる。弥生時代から連綿と，箱式石棺を埋葬の主体とする伝統を守り続けたのも，このような理由が一端にあるものと考えられる。(藤田)

〈参考文献〉

『長崎県遺跡地図―対馬地区―』長崎県文化財調査報告書第118集　1995年　長崎県教育委員会



1　深入遺跡　　2　エーガ崎遺跡　　3　銭島遺跡　　4　サエ遺跡　　5　松山遺跡
6　観音鼻遺跡　　7　住吉平貝塚　　8　輪島古墳　　9　クワバル古墳

第3図　クワバル古墳周辺の地形と遺跡位置図

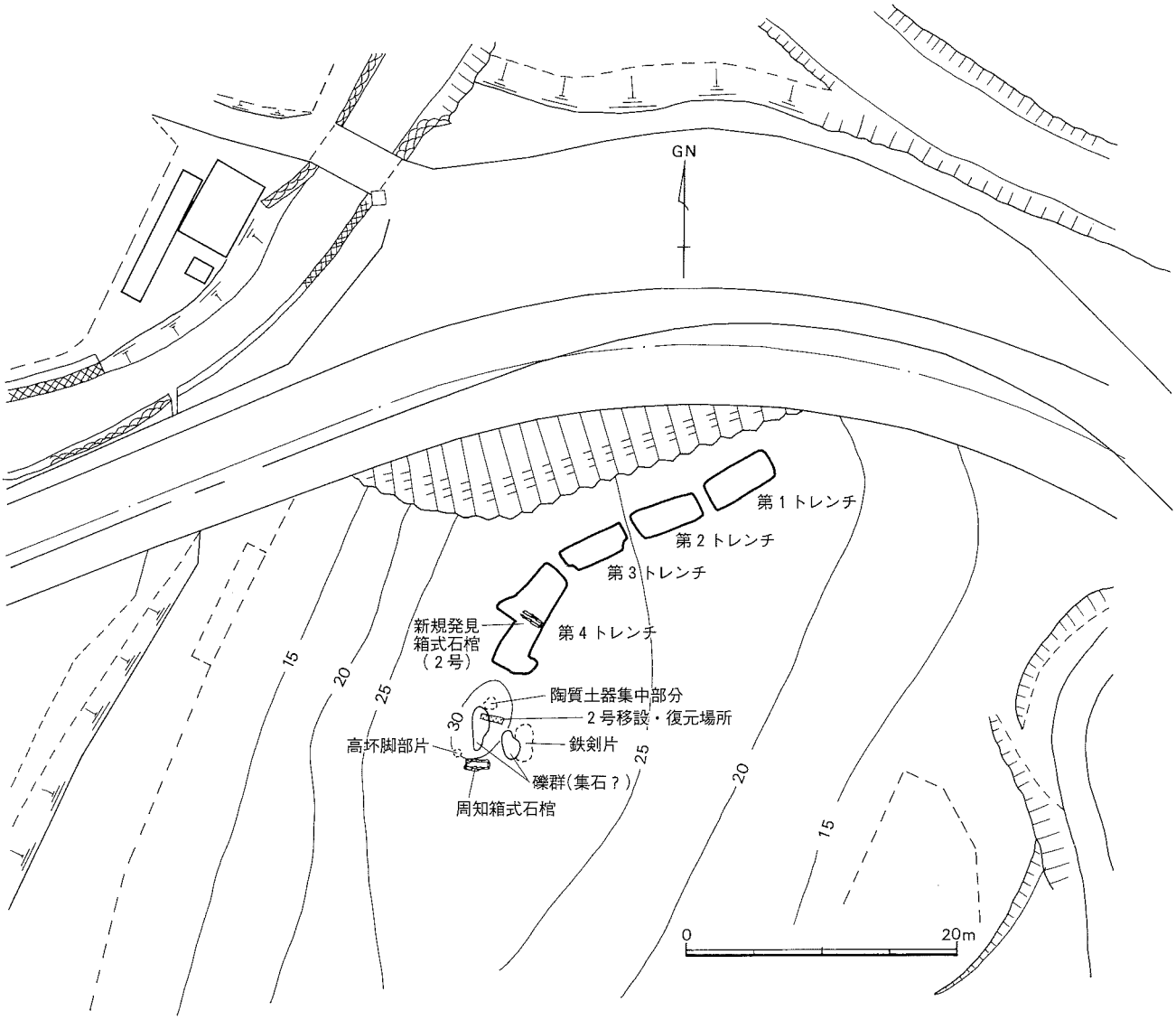
III 調　　査

1　調査の概要

・範囲確認調査

道路改良工事の影響をうける部分に，北側から丘陵の頂上に向かって２×５ｍの試掘壙を４箇所（第１～４トレンチ）設定し，第１トレンチから調査をおこなった。また丘陵の頂上にある周知の箱式石棺周辺には，板石などがみられるため切り株・腐植土の除去作業や清掃も並行しておこなった。板石などが多数みられるが，径約30cmの礫，あるいは第１図のような礫の配列も確認できない。「積石塚」という感じはなかった。

第１～３トレンチまで掘り下げていくが，現地表面から20～30cmほどで地山に達し，遺構・遺物ともみられない。基本的な層序は黄褐色の岩盤（地山）を含めて３層に分けられる。１層は表土で黒褐



第４図　試掘壙配置図

色の腐植土(約10cm)，２層は黄褐色土で地山の風化したものと思われる。第４トレンチでは，現地表面から15cmほど掘り下げるとトレンチの南端で板石がみられた。その周囲を確認するためにトレンチを西と南方向へ拡張したところ，土圧でやや傾いてはいるが斜面から箱式石棺（周知のものを１号新規のものを２号とする）を検出した。第４トレンチの層序は前述したものと同様である。箱式石棺は南側と北側の側壁と，東側の小口いしだけが残っており，石棺内の埋土を取り除くと石棺は３層の地山に掘りこんで造られていた。埋土は腐植土と黄褐色土で，副葬品はなく，周囲からも遺物は出土しなかった。この１号石棺付近には棺材となるような石材が多数みられ，他に検出される可能性があったので，１号石棺の方向へある程度の範囲で腐植土などを取り除いた。１号石棺の北側から陶質土器，丘陵の東側斜面から鉄剣片が出土したが，２号石棺以外新たに検出されなかった。遺物は１層からの出土である。

この調査において確認できたことは，１号石棺の周囲に版築などはなく，人工的に盛土して造られた形跡もない。また積石塚の可能性も考えられるが，現在の状況からは積石塚であったとはいいがたいことである。新たに箱式石棺が発見されたことなどから工事をおこなう前に，来年度改めて本調査を実施することにした。(荒木)

・本 調 査

平成10年度の調査は５月11日から同22日まで実施した。11日は雨・風ともひどかったが，昨年来の現地の状況を確認するために現地に向かった。調査を行う予定の場所は，かなり急な坂を上ったところで，この部分は若干の草木の繁茂があったが，１号石棺・２号石棺の周辺はさほどではなかった。翌12日も雨・風が残っていたが午後には快方に向かったため，通路部分の草などを刈り取り，枯れ枝等の片付けを行い，その後石棺周辺の表土剝ぎにかかった。かつての盗掘か棺外の祭祀に関係したものか，陶質土器片などが散布している状況が認められた。石棺とその周辺の清掃終了後，写真撮影を行い，実測にかかった。

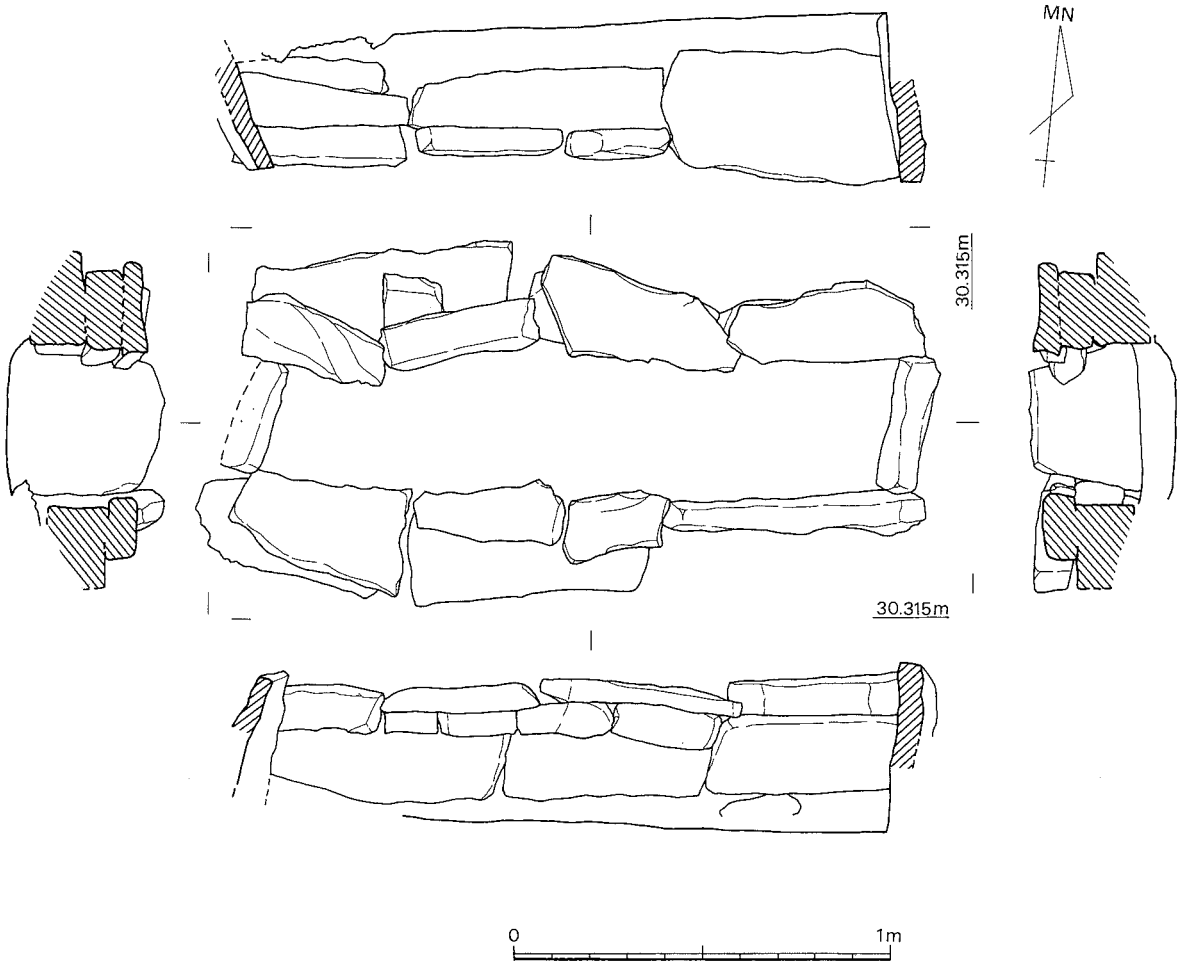
次の週は天気もよく，作業は順調に進み，予定どおり実測を終えた。道路拡幅予定地内にあって，損壊が懸念された２号石棺を移築することに話が進み，１号石棺の北側に移した。21日は現場でのレベルなど最終の確認作業を行い，22日には器材・遺物などの梱包を行い，夕刻豊玉町を離れた。

(藤田)

2　埋葬主体部

・1号石棺

曽川に面する山塊から東に向いて伸びる丘陵の先端部，部分的な高まりの頂上部分のほぼ中央，標高ほぼ30mの場所に構築されている。もともと墳丘としての高まりがあったものかについては定かではない。石棺は地山の風化礫（対州層群）を切り込んで築き，N-84°-Eの，東西に近く主軸を向けている。この切り込みの規模については未調査のため確認していないが，長さ約2m，幅約0.5mである。地山面への切り込みの深さは，東側にやや深く掘られているようでもあるが，側壁の石材の底部はほぼ水平に置かれている。この土壙の切り込み面の四隅に板石を立て並べ，上部の凹凸を横にした石でほぼ高さをそろえている。しかし，石棺の北西隅のみは例外で，最下段から板石を横に置いている。石棺の内法の大きさは，いずれも中央部分で長さ1.62m，幅0.43m，深さ0.37mを計る。また，石棺の東西の幅は，東側で0.35m，西側で0.30mあり，わずかではあるが東側が広くなっている。両小口の石材についても，東側の方がしっかり据えられたような感じを受け，こちらに頭部が置かれたように思われる。このことについては，昭和23年の東亜考古学会の調査時に玉類が東側から出土していることをとらえ，東枕ではなかったかと推測されているところである。



第5図　1号石棺実測図

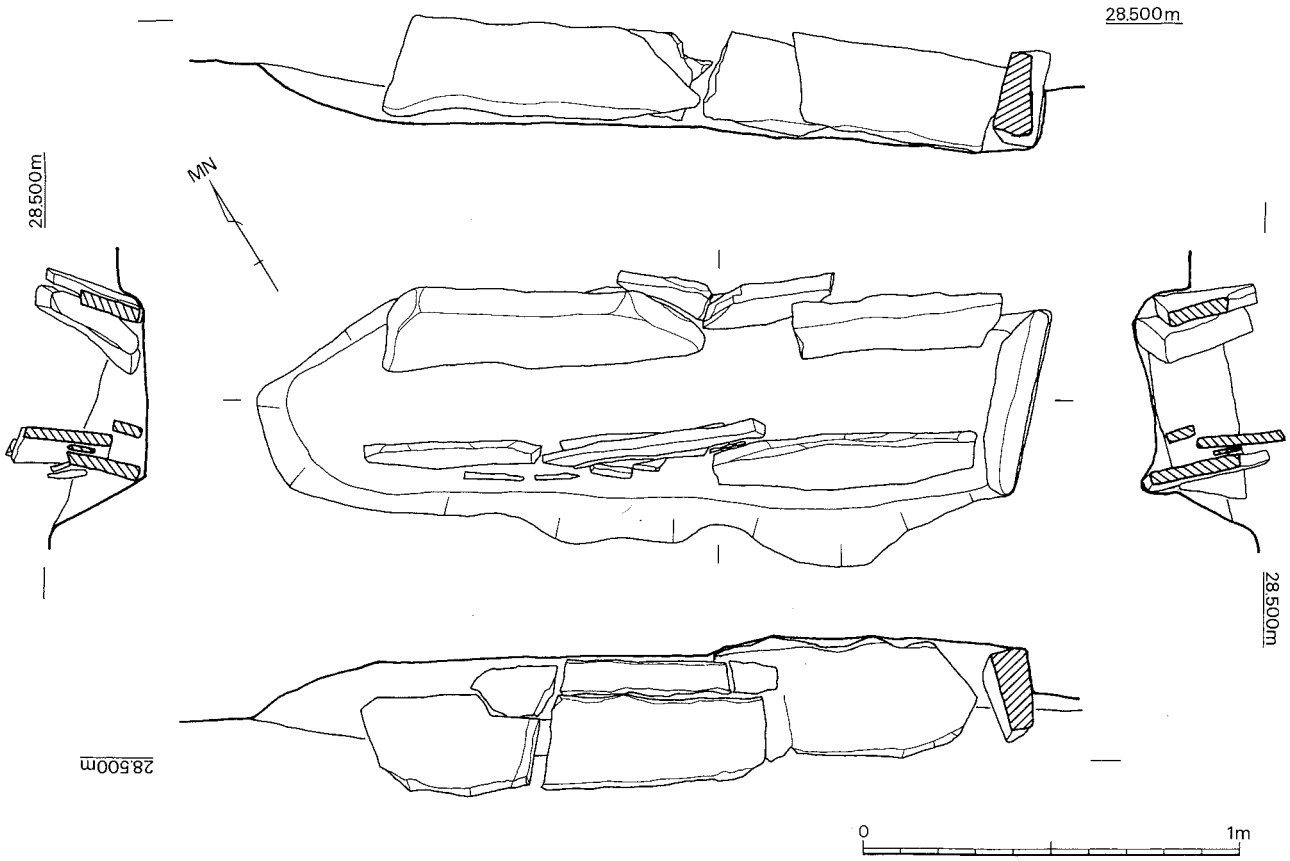
昭和23（1948）年の東亜考古学会の調査時には，すでに天井石はなかったとのことで，床面もそのままの状況であろう。

現存する石棺の側壁の高さの統一性からすれば，蓋石はこのすぐ上に架けられていた可能性が強い。また床面には扁平な板石，あるいは小円礫など全く見られないことから，当初からそれらによる設備はなかったものと思われる。

以上のような状況から，副葬品の埋置の仕方については不明といわざるを得ない。また，先述したように棺外からの遺物の出土についても，後世に掘り出されたものの一部なのか，あるいは棺外に置かれていたものの一部なのかについても断言できる状況ではない。（藤田）

・2号石棺

1号石棺の北約11m，標高約28.5mの緩やかな斜面で検出された。蓋石と西側の小口石はない。側板は土圧で北に傾き，割れている。北側の側板3枚，南側は2枚である。北側の側板の西側の1枚と小口石は，角の丸い水磨されたような厚さ5cm程度の石材，残りの側板は板状に割れる厚さ4cm程度の石材を使っている。石棺の主軸はおおよそ北西－南東のN-58°-Wにとる。内法は長さ約160cm，幅約30cm，深さ約30cmである。副葬品はない。土壙の掘り込みは不定形である。（荒木）



第6図　2号石棺実測図

3　出土遺物

昭和23年の東亜考古学会の調査の際に，土師器の高坏片や勾玉２個・管玉16個・ガラス玉などが出土している。また同時に出土した土器片について須恵器とされているが，今回の調査では明白な須恵器と断言できるものの出土はなく，「割れ口は紫褐色をなし，縄蓆文のタタキがある」ことからすると，陶質土器であった可能性が強い。

・土　　器

土師器と陶質土器が出土している。

・土 師 器

土師器の出土量は少なく，全体の形がわかるものはない。４点が図化できたが，いずれも高坏で坏部分と脚端部を欠いている。

１は脚上部で直径2.8cm，高さ6.3cmが残る。外面は荒れており，坏内面は剝離している。内面にはヘラ様のもので押さえつけたような痕跡がある。内外面ともに暗茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は普通である。

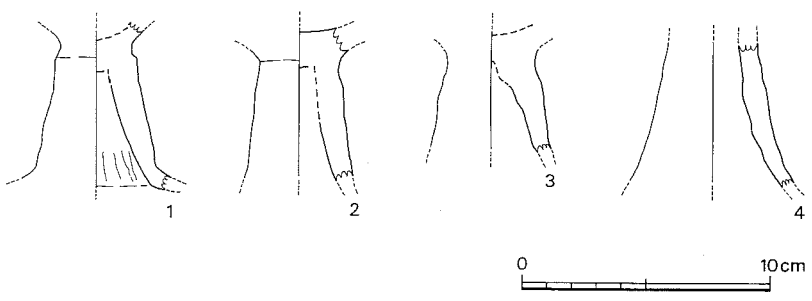
２も器表が荒れている。やや細身の脚で，内側は横方向へのケズリの痕が見られる。わずかに赤味がかった茶色で，内側も同じような色である。胎土は良い。焼成は普通である。

３は脚の上部である。外面はわりときれいで，ナデて仕上げたような痕跡が認められる。内側は横方向へのケズリ痕が上部に残り，下部はナデて仕上げている。内外面とも赤味をおびた茶色。胎土は良い。焼成は普通。

４は器表が荒れ，茶褐色を呈している。内側に横方向へのケズリの痕が残る。胎土に小さな砂粒が混じる。焼成は普通である。

・陶質土器

１は坏であるが，通常の坏か高坏かは不明。内彎しつつ伸びる体部に，ほぼ水平に外方に突き出た受け部と，外反しつつ上方に伸びる立ち上がり部が付く。受け部先端はやや尖るが丸くおさめ，立ち上がり部の先端は外方につまみ出すようにおさめている。外面は黒灰色で艶がある。内面は濃い灰色を呈している。器壁の断面部分は小豆色。精良な胎土を用い，焼成も良好で堅く締まっている。



第７図　出土遺物実測図（土師器）

2から6はいずれも高坏の脚部である。2は短めでやや厚みがあり，方形の透かしの一部が残る。脚先端部を内側に折り曲げた形で，端部は鋭くおさめている。透かし部分の下に帯状の鋭い段がつく。外面，内面ともに灰褐色で焼成は良い。胎土も良いが，小さな砂粒が混じる。

3は先端部をやや平らにおさめた作りで，内外面，断面ともに淡い黄褐色を呈している。表面は釉のためかザラついている。復原での，脚端部分の直径は8.3cmある。

4は薄手の作りで，先端をつまみ出したように作る。内外面ともに茶褐色で内面はやや濃いところもある。断面はチョコレート色。脚端部の復原径8.8cm。胎土，焼成ともに良好である。

5は先端部を窪ませ気味に作り，途中に鋭い稜がつく。内外面ともに濃い灰褐色で，器壁の断面は小豆色だが，中心部分が黒くなっている。胎土は精良で堅く焼き締まっている。

6は薄手の作りで，先端部近くと透かしの下に鋭い突帯状の段がつく。透かしは幅が狭く，長方形になるようであるが，二箇所の透かしの位置が近く，この割で全面にあるとすれば箇所透かしがあったものと推測される。全体的に灰褐色で器壁は小豆色。胎土・焼成ともに良好である。

7は小形で平底の坩である。口縁径8.5cm，高さ7.2cm，底部の直径4.4cm，胴部の直径5.9cmを計る。口縁部はほぼ直線的で，中ほどにロクロ成形時に突帯をつまみ出しており，先端部は尖らせ気味におさめている。胴部の半分より下にはカンナ（ナイフ）様のもので削ったような痕跡が認められる。平底だが中央部が若干浮く。外面は全体的に濃い灰色で艶がかっており，内面には灰褐色の自然釉がかかっている。器壁断面は小豆色。胎土は精良で焼成も良い。

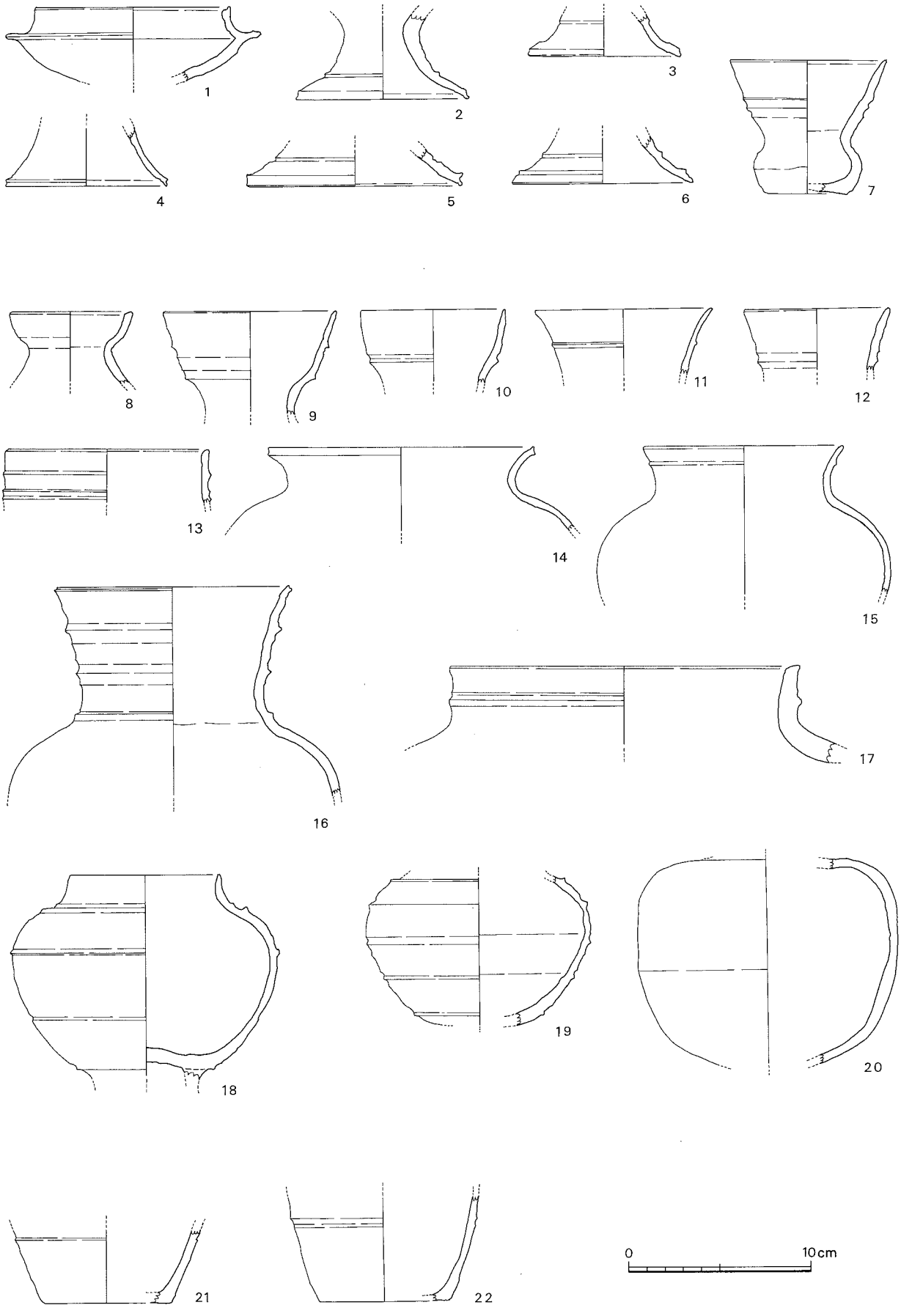
8は口径6.6cmの，小形の器台になるものと考えられる。恵比須山遺跡の1号石棺から出土したものに類似し，それから推測すれば，高さ6～7cmになるものと思われる。外面は黒褐色で，内面には灰褐色の自然釉がかかる。内彎して伸びる口縁先端部の内側をやや平らにおさめている。頸部から胴体に続く部分が外反しているが，全体としての形は不明瞭である。胎土・焼成ともに良い。器壁内はチョコレート色を呈する。

9は復原口縁径9.4cmの壺の口縁部と思われる。薄手の作りで，二段の稜も鋭く付けられている。下部の稜より上部は直線的に伸び，先端部は尖るように仕上げている。下部の稜から先端部までは褐色で艶があり，その下は灰色を呈する。内面は黄褐色で，部分的に自然釉が認められる。胎土，焼成ともに良い。

10は小形の坩か壺の口縁部と思われる。内彎して伸びる口縁部は，先端部を尖らせ気味におさめている。頸部に移行する付近に浅いくぼみをつけ，下側に稜が付く。口縁部の直径は7.8cmほどに復原できる。外面と断面部分は濃い灰色で，内面は灰色。胎土には荒い砂粒を含む。焼成は良い。

11は薄手の作りで，先端を尖らせるようにおさめた壺の口縁部と考えられる。途中に華奢な突帯がめぐる。外面は黒灰色，内面は灰色で，断面部分はチョコレート色を呈している。胎土，焼成ともに良好で，堅く焼けている。

12は壺，あるいは坩の口縁部だと思われる。ほぼ直線的に伸びる口縁部の先端をまるくおさめている。途中に小さな突帯様のものをつまみ出している。復原した口縁径は7.9cmである。外面は灰褐色・



第 8 図　出土遺物実測図（陶質土器）

濃灰色，内面は灰色を呈する。胎土，焼成ともに良い。

13は壺類の口縁部と思われる。ほぼ直立して伸び，鋭いつまみ出しの帯様の稜がある。復原口縁径は10.8cmである。内外面とも黄緑がかった自然釉に覆われている。器壁の断面は灰色。胎土，焼成ともに良好。

14は丸みの強い壺の口縁部で，口の部分の直径が14.4cmほどになる。全体に薄手で，口縁先端部は鋭い作りである。胴体の最大径は22cmほどになるものと思われる。外面は灰色で，一部に自然釉が認められる。内面と断面部分は灰色。胎土，焼成はともに良好である。

15は丸い壺の口縁部と胴体である。薄い作りの胴体に，外反して伸びる口縁部がつき，その先端を丸くおさめている。頸部の上に一条の稜を巡らせている。内外面ともに灰色。胎土，焼成ともに良い。

16は長頸壺の肩部から口縁部である。丸い胴体に，やや外反して伸びる頸がつき，先端部は鋭く作って凹みをもたせている。肩から頸にかけて，３条の突帯をつまみ出して施している。最大胴径は18cm内外，口縁部の直径は12.4cmほどと思われる。頸部の一番狭いところで約8.8cmである。内外面とも灰色を呈するが，部分的に濃いところもある。全体的に薄手のつくりで，丁寧に作ったという感じを受ける。胎土は良好だが，焼成はわずかに甘いように見受けられる。

17は大形の壺の口縁部で，肩の部分までが出土している。厚い作りの胴体に短い頸部が続き，口縁先端部はほぼ平らにおさめている。先端部の下側に太目の突帯がある。口縁部の直径は19cmほどと推測される。外面は濃い灰色，内面と断面部は灰色を呈している。胎土，焼成は普通である。

18は脚台付きの短頸壺。やや外反しつつ伸びる短い口縁部の先端は，尖らせ気味におさめている。頸部と胴体上部に，つまみ出して作ったような帯がある。この間に金属の刃物で細かく切ったような斜格子文が施されているが，上部は自然釉がかぶっている。斜格子文から胴体最下部につながるように，直径約1.3cmの断面が円形の把手が付けられている。丸い胴体の底部は持ち上がり，脚部に続く。この部分の脚の直径は5.6cmある。口縁部の直径は8.0cm,胴部の最大径は14.4cmを計る。黄緑がかった灰色の自然釉は，口縁部から肩にかけてと内面底部にかかっている。外面の斜格子文から下は灰色を呈するが，濃い灰色の部分もある。内面は黄色みがかった灰色で，断面部分はチョコレート色をしている。胎土・焼成ともに良く，堅く焼き締まっている。

19は壺であるが，脚が付くものかはわからない。また取っ手が付くのかも不明である。図上で復原した最大胴径は12.2cmを計る。５本の稜があり，最上の稜はすぐ口縁部に接するものと考えられる。２段目と３段目の稜の間には，たぶん金属の刃物による細い斜格子文が施され，一部に自然釉がかかっている。３段目より下部は黒灰色を呈し，艶がある。器壁の断面は小豆色で，胎土は精良なものを使用している。焼成も良好である。

20は胴径14cmほどの短頸壺と思われる。丸い胴体には突帯や刻みなどの装飾は全くない。肩部より口縁部にかけて黄色味がかった自然釉がかかり，内面底部にも同様の自然釉が付着している。外面は黒褐色と灰色，内面は灰色で断面部分は濃い灰色を呈している。胎土，焼成は良い。

21は底部であるが全体の形を知りえない。直径6.8cmほどの平底から，わずかに内彎しつつ伸びる体

部が続く。途中に段状のものが認められるが，意図的なものか判然としない。内外面とも濃い灰色で，断面部分はチョコレート色。胎土，焼成は良好である。

22は小形の短頸壺の胴部から底部と考えられる。平底から，わずかに内彎しつつ伸びる胴体が続く。胴体の底部に接する付近には，刃物で削られたような痕跡が残る。その上部には浅い溝状のくぼみがめぐっている。外面は濃い灰色，内面と断面部分は灰色を呈している。胎土，焼成ともに良い。

23から30までは破片で，全体の形を知りえない。おそらく短頸の壺の部分と考えられる。23は器表の丸みなどから見ると，明らかに器の内側に施文されており，理解に苦しむ。外面は灰色，内面は濃い灰色で，胎土に小砂粒を含む。24は内外面とも濃い灰色を呈し，胎土も良い。25も内外面とも濃い灰色。胎土は良い。26は内外面ともに灰色。胎土には砂粒を含んでいる。27は薄い作りで，内外面ともに暗灰色で，断面部分はチョコレート色を呈する。胎土は良い。28は内外面，断面部分ともに灰色。器表にわずかな凹みがめぐる。胎土は良い。29は内外面ともに濃い灰色で，断面部分はチョコレート色を呈する。胎土は良い。30は壺の胴体部分で，内外面とも濃い灰色。上部はナデて文様を消している。胴体に6本の浅いくぼみがめぐる。胴体の最大径は30cm前後と推測される。胎土には石英などの粒が若干混じっている。23から30までのいずれも，焼成は良い。(藤田)

・勾　　玉（第9図　図版13)

深く沈んだ濃い緑色の勾玉で，1号石棺の北東側4mほどの場所から出土した。長さ35.5mm，胴体中央部での幅11.5mm，厚さ12mmを計る。「C」の字形をしており，尾部に比べ頭部がやや大きい。穿口は片側からで，大きな方は4mm，小さい方は2.5mmほどある。頂部に，幅約1mmの溝を3本切っている。両側の穿口部分に，わずかに紐ずれと思われる痕跡が認められる。体部に原石の縞模様が認められる。碧玉製と考えられる。

昭和23年の東亜考古学会の調査でも2点出土しているが，そのうちの一つは「青緑色に白い縦縞のある碧玉」製と報告されている。(藤田)

・鉄 製 品（第10図1～5　図版12)

鉄製品は鉄剣片，斧状鉄製品が出土・採集した。他に不明の鉄片がある。

鉄剣（1～4）

鉄剣片は5点で，いずれも東側斜面の礫群の中から採集された。細部は錆のため不明である。1は2点が接合し，現存長は8.9cm，幅約4cm，厚さ約1cm。鏑は錆のため丸くなっている。茎部に近い部分と思われる。2の現存長は5.5cm，幅約2.6cm，厚さ約0.6cm。3の現存長4cm，幅約2.7cm，厚さ約0.6cmで，接合しないが同一個体の可能性がある。4は鋒に近い部分であると思われる。現存長は4.1cm，幅約1.7cm，厚さ約0.4cm。

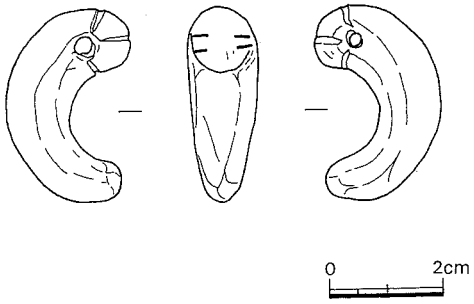
斧状鉄製品（第10図5　図版12)

袋状基部をもつ鋳造鉄斧の可能性がある。錆のため細部は不明である。現存する長さは10cmで，刃

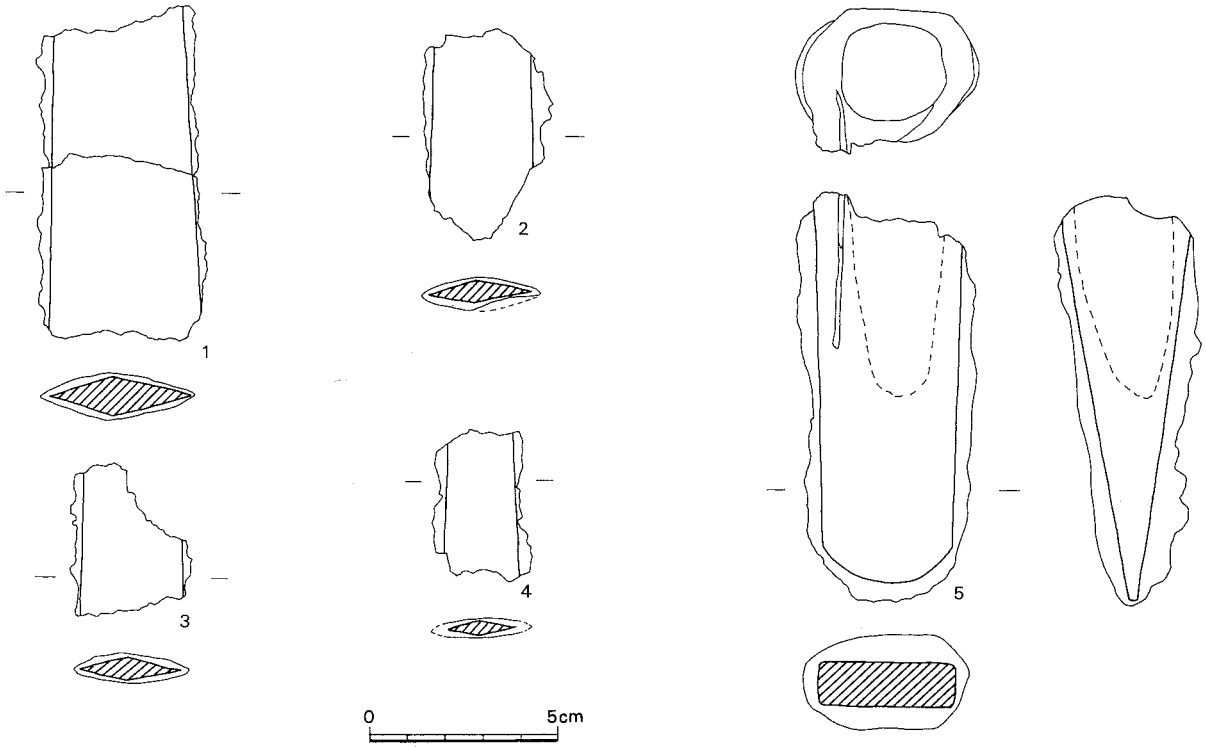
部幅約3.5cm。基部の断面はほぼ楕円形で幅は約4cm。厚さ0.3cmほどの鉄板がむき出しになっている部分がある。重さ249g。１層出土。（荒木）

＜参考文献＞

川越哲志1993「第２章第１節３　袋状鉄斧」　『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣



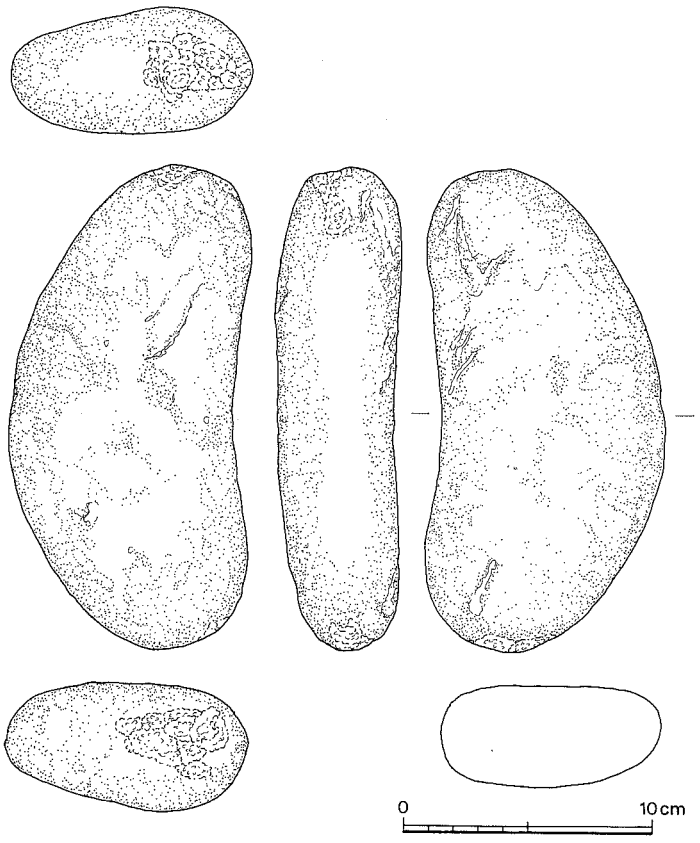
第９図　出土遺物実測図（勾玉）



第10図　出土遺物実測図（鉄器）

・石　　器（第11図　図版13）

石器は１点のみで，粗粒砂岩の水磨礫を利用した敲き石である。長さ19.2cm，幅8.9cm，厚さ5cm,重さ1,340g。両端には敲打痕が顕著にみられる。側面には磨石として使った痕跡が部分的にある。１号石棺西側の１層から出土した。（荒木）



第11図　出土遺物実測図（石器）

IV まとめ

1号石棺と2号石棺との関係については，1号石棺も箱式石棺の部類に入るものと考えられる。一部に極く例外的な場所もあるが，基本的には四壁には板石を立てて築いている。上の横にした石は蓋石の調整のためのもので，当初からの構築を目論んだものとは考えられない。

2号石棺の造られた場所は，1号石棺のある場所と標高差で約1.5m，距離差約10m強であり，傾斜もかなりある。1号石棺を意識して距離を保ったもののように思われる。また，1号石棺と2号石棺との間に，なんら埋葬施設らしいものが認められないのも1号石棺の特異性を示すものではないか。

それぞれの石棺に使用された石材や構築法についても，明白な相違が認められる。1号石棺は厚みのある頑丈な感じの石材をしっかりと組んで造っているのに対し，2号石棺の方は薄手の板石をやや粗雑に組んだという印象を受ける。ここにも1号石棺との差異が認められる。

さらに，副葬品についてであるが，2号石棺からの出土はなく，その周辺からの出土品も2号石棺からのものとは認めがたい。1号石棺と2号石棺との間に出土の陶質土器や鉄器，勾玉などは1号石棺の埋葬に直接あるいは間接に伴うものと考えるのが自然であろう。

1号石棺と2号石棺についてこのように見るとき，対馬で普通に見られる墓域の共有という点で大きくかけ離れているように思われる。対馬では単独での石棺の埋葬例としては，西海岸の大将軍山古墳が知られているにすぎず，他の多くは数基から10数基が墓域を共有している。コフノ隈遺跡・朝日山遺跡・佐護白岳遺跡・蒙古塚（トウトゴ山遺跡）・恵比須山遺跡・中道遺跡例などである。以上の例などからすると，クワバル古墳の場合，1号石棺に近接する墓の設営が禁忌，あるいは憚られるような何らかの事情があったのではないか，との推測も可能ではないだろうか。1号石棺に葬られた人物の権威あるいは社会的地位の，他を圧倒する状況が窺われる。それに加えて，この周辺にこのような状況を示す遺跡の存在が知られていない現在，何か対馬の他の地域と異なった事情の存在についても考えさせられる点が残る。今後に残された問題の一つでもあろう。

被葬者についてであるが，1号石棺・2号石棺に埋葬された人物間の関係については不明と言わざるをえない。

2基の石棺の構築方法や規模について見ると，内法での長さは1.6mほどであるが，幅は1号石棺で0.35m，2号石棺で0.3mであり，成人を埋葬するには性別を考えてもやや狭く華奢な感じを受ける。やや傾けた状態で埋葬したものであろうか。いずれにしても人骨の出土がないため断言はできない。

対馬の東海岸にはさほど有力な古墳時代の遺跡は多くはないが，若干の遺跡について見てみたい。クワバル古墳と多少立地の仕方や墳墓群の構成のあり方で異なるが，コフノ隈遺跡や朝日山遺跡に近いものが感じられる。特にコフノ隈遺跡から出土の遺物は似た面がある。しかし，須恵器の出土がクワバル古墳では認められないことから，クワバル古墳が古く5世紀初頭か前半に位置付けられる。弥

生時代から曽川流域で勢力を蓄え，その後東海岸では北部に移り，コフノ隈遺跡・朝日山遺跡へと続くように見受けられる。

次に，クワバル古墳が対馬において普通に認められる墳墓群とは異なり，海岸から入り込んだ場所にあるのはどういう理由なのであろうか。対馬の普通の墳墓のあり方からすると，曽川が曽浦に注ぎ込む近辺に営まれたとしてもおかしくない状態であるが，内陸部に1.5kmほどもはいった場所に築かれたのはどのような理由によるものであろうか。

クワバル古墳の北西約５kmの場所に恵比須山遺跡・蒙古塚（トウトゴ山）遺跡など，５世紀前半代の陶質土器などが出土する遺跡がある。これらの遺跡は，対馬西海岸でも有数の遺跡の集中する三根湾から南東方に入り込む吉田浦の最奥部に位置している。対馬の西海岸において，５世紀前半を中心とする時代に朝鮮半島との交流に従事していた勢力に，何らかの理由で東海岸との結び付きの必要があった可能性も考えられる。三根湾の吉田浦周辺の勢力が東に目を向け，曽川流域の勢力と結び付いたものであろうか。この逆の状況についても推測することができる。吉田浦周辺の地域とは曽から川に沿って約４kmの陸上の交通路で，さほどの困難はなかったのではなかろうか。あるいは浅茅湾まわりの海上路より便利，あるいは必要性があったことも考えられる。

また，このような状況は６世紀にいたり，浅茅湾最奥部と東からの雞知の入江を同時に押さえ得る中央権力の登場があって，対馬での勢力圏の中心が移動したことから変化したことが窺える。

今回の発掘調査は町道の拡幅工事に伴う，ごく小規模なものであった。しかし，昭和23年の東亜考古学会の調査と遺跡の紹介以来50年，半世紀ぶりに世に出たものである。調査の結果，出土の遺物により石棺の築かれた大まかな時代は判明したが，対馬の東海岸での遺跡のあり方や，西海岸の遺跡との関係，その前後の状況など，さらに考察を要する複雑な事態にたち至たることとなってしまった。しかし，今後の調査例が増え，新しい知見が生じることが楽しみといえば言えよう。

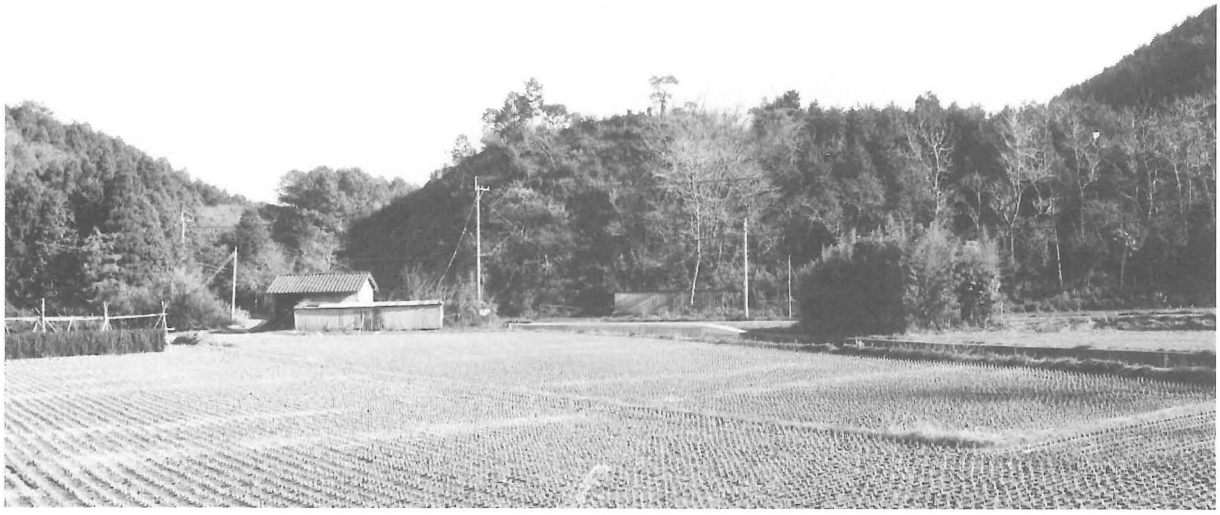
最後になったが，この調査にあたっては多くの方々の助力と協力を頂いた。調査にこころよく同意くださった地権者の方々，作業に従事いただいた地元の皆様，直接工事に携わっておられる町の建設課の方々，また，調査の準備から最後までお世話いただいた町教育委員会の皆様に，厚くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。　（藤田）

参考文献

『対馬』　水野清一・樋口隆康・岡崎敬　東方考古学叢刊２種第６冊　東亜考古学会　1953年
『対馬の自然と文化』　九学会連合対馬共同調査委員会編　1954年
『対馬――浅茅湾とその周辺の考古学調査――』　長崎県文化財調査報告書第17集　1974年
『トウトゴ山遺跡』　坂田邦洋　『対馬の遺跡』　縄文文化研究会　1975年
『恵比須山遺跡』　坂田邦洋他　『恵比須山遺跡発掘調査報告』　長崎県峰町教育委員会　1974年
『住吉平遺跡』　坂田邦洋「住吉平貝塚」『対馬の遺跡』長崎県文化財調査報告書第20集　1975年
『コフノ隈遺跡』　上対馬町教育委員会　上対馬町文化財調査報告書　第１集　1984年
『原始・古代の長崎県　資料編Ⅰ』　長崎県教育委員会　1996年
『中道壇遺跡』　長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書第90集　1988年
『対馬・壱岐の古墳』「探訪日本の古墳　西日本篇」　有斐閣　横山巳貴子　1981年
『県内古墳詳細分布調査報告書』「長崎県文化財調査報告書第106集」長崎県教育委員会　1992年

図　　版

東から



北西から

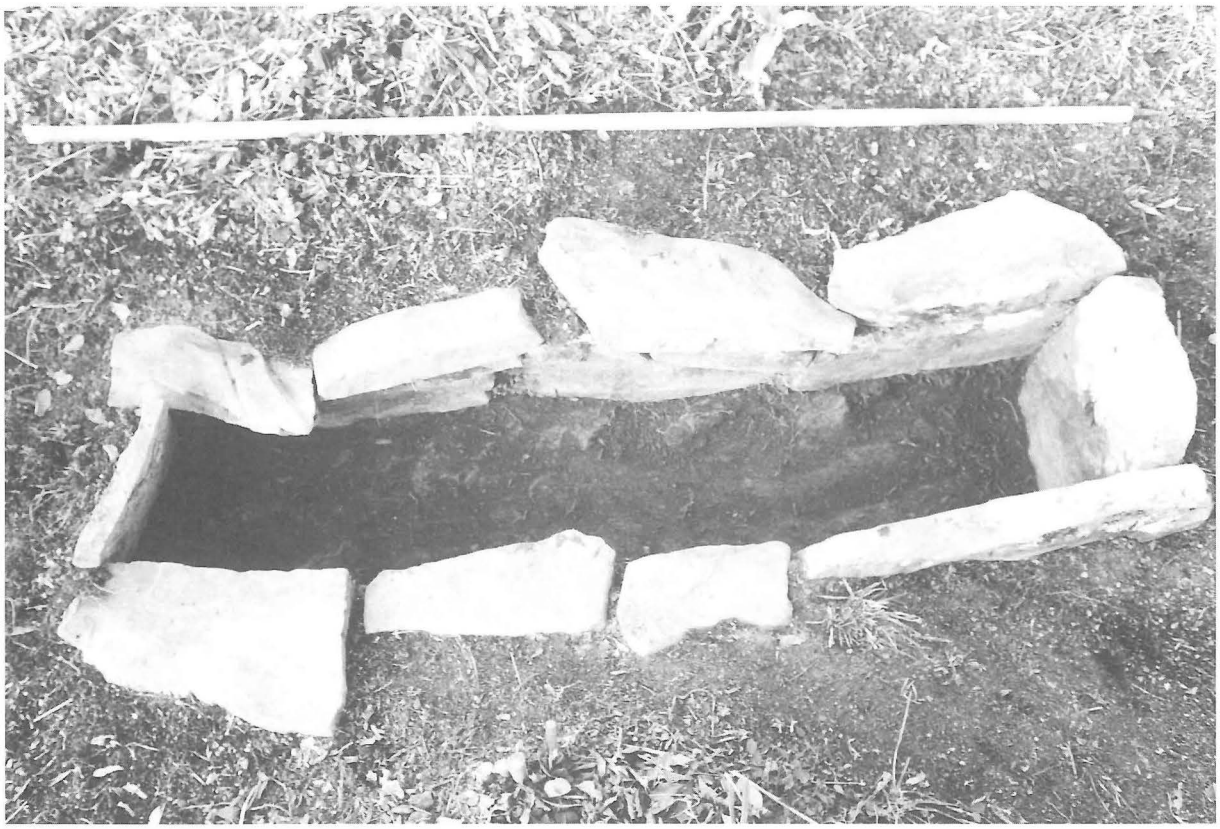
クワバル古墳遠景

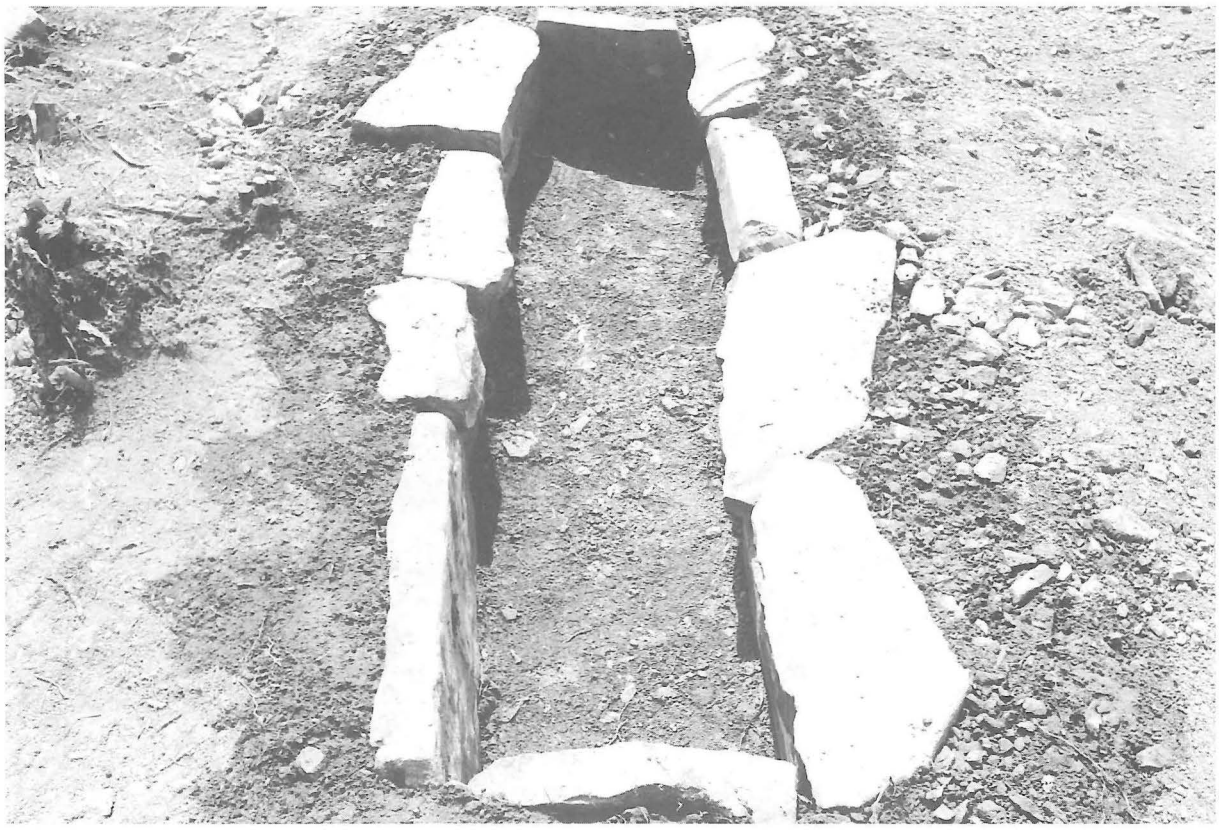
図版 2

クワバル古墳近景

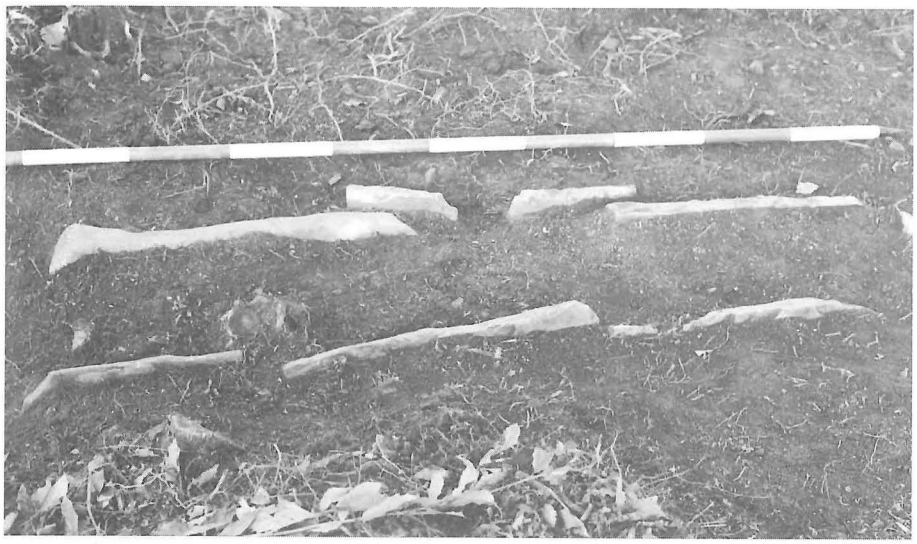
クワバル古墳近景と調査風景

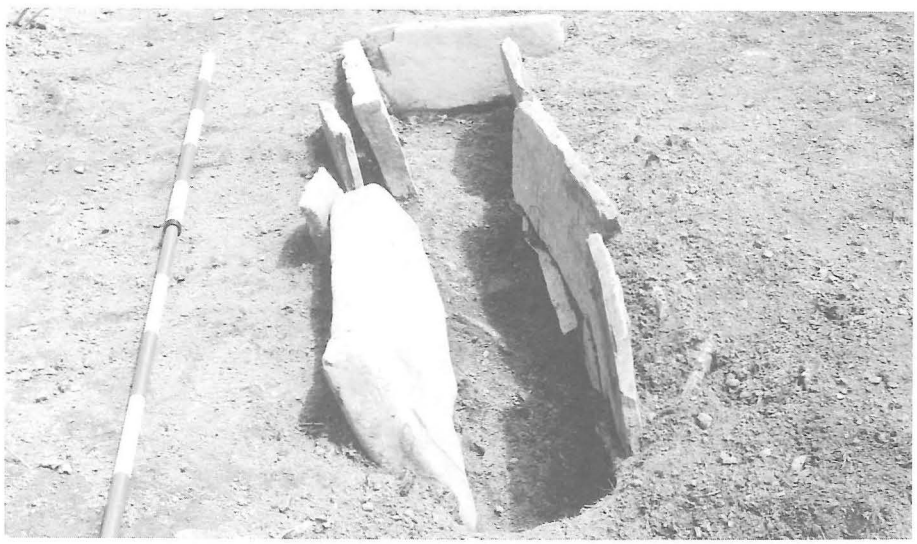
図版 4





クワバル古墳 1 号石棺の状況

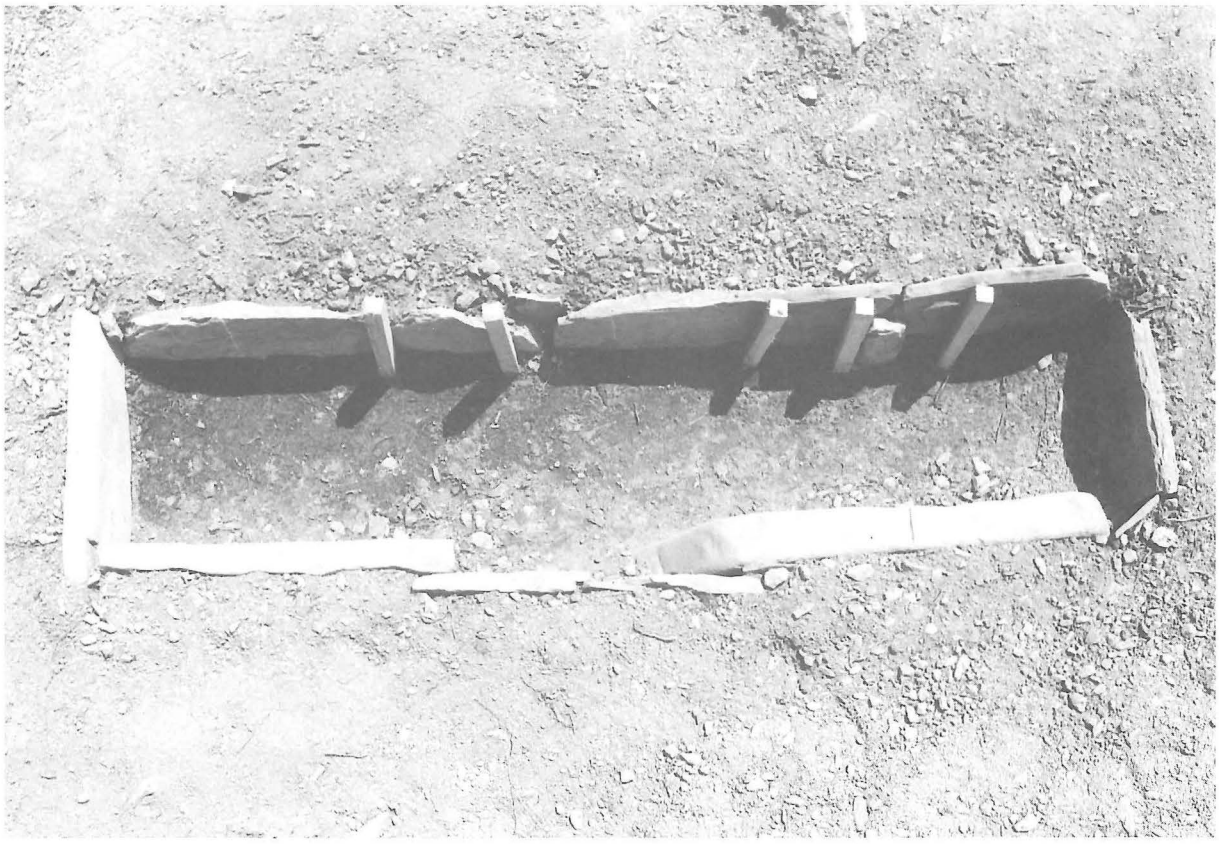




クワバル古墳 2 号石棺の状況

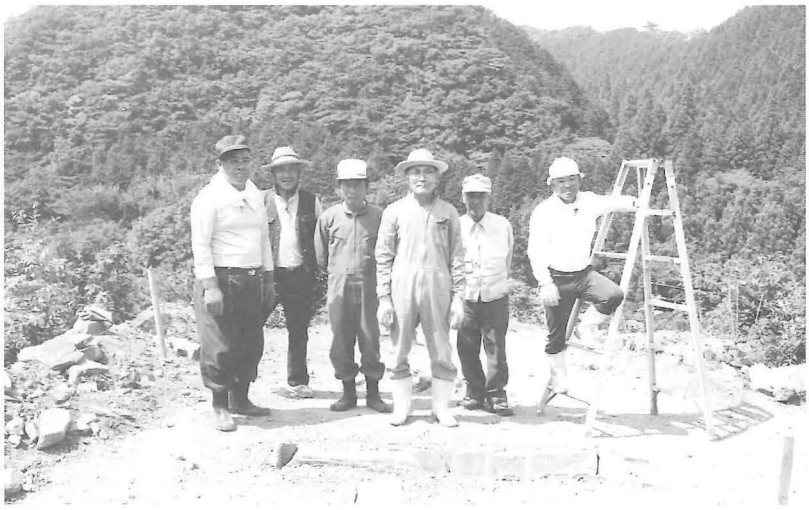
図版 6

クワバル古墳 2 号石棺の調査状況

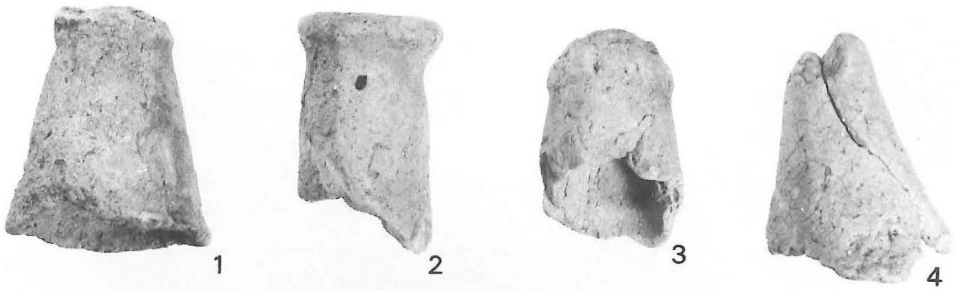


クワバル古墳 2 号石棺復原後の状況

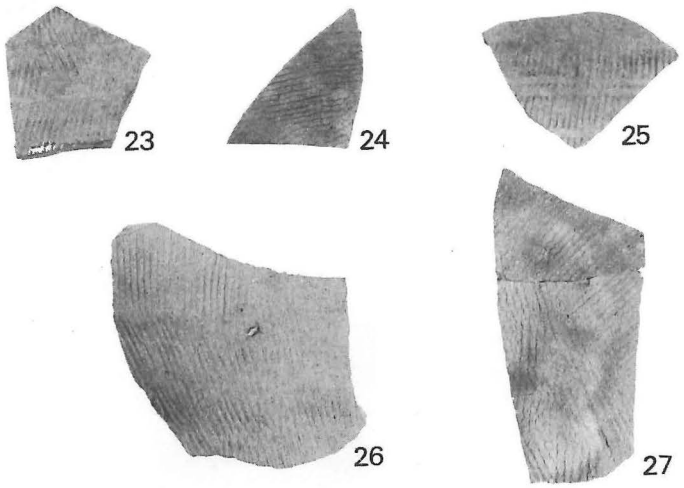
図版 8

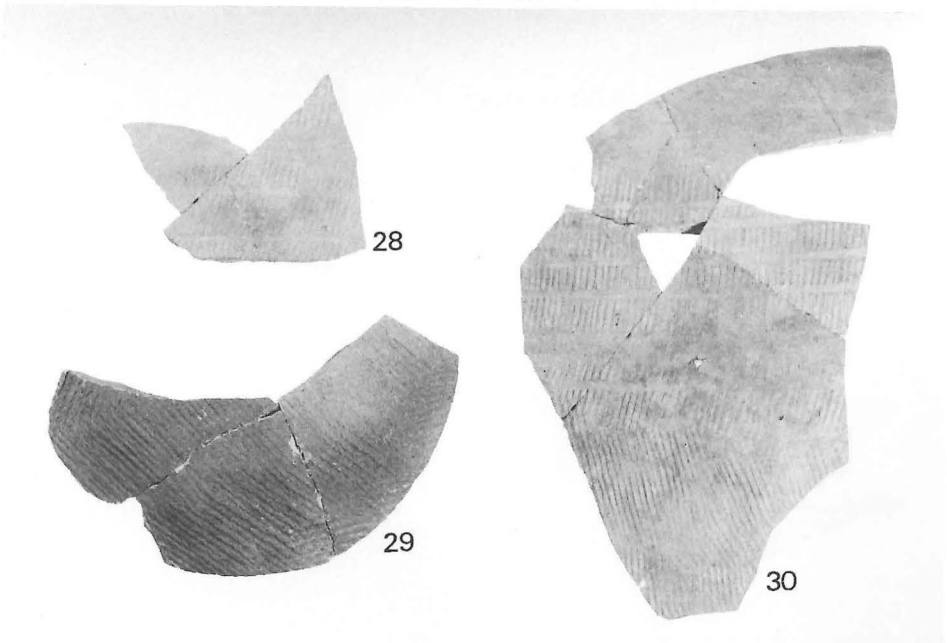


クワバル古墳 1 号石棺と 2 号石棺



（土師器）

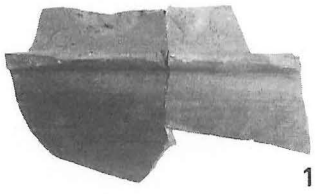


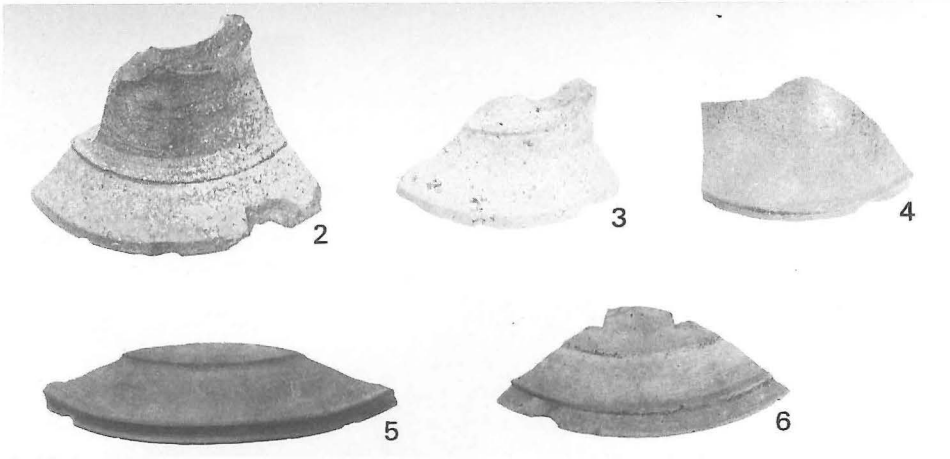


（陶質土器）

出土遺物

図版10


1

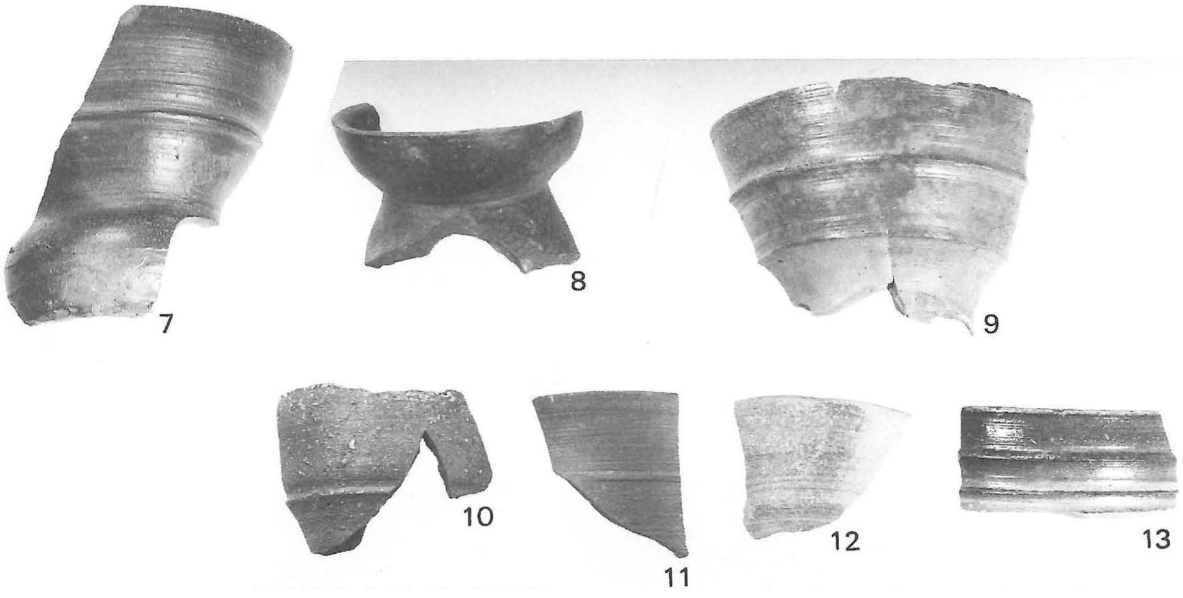

2

3

4

5

6


7

8

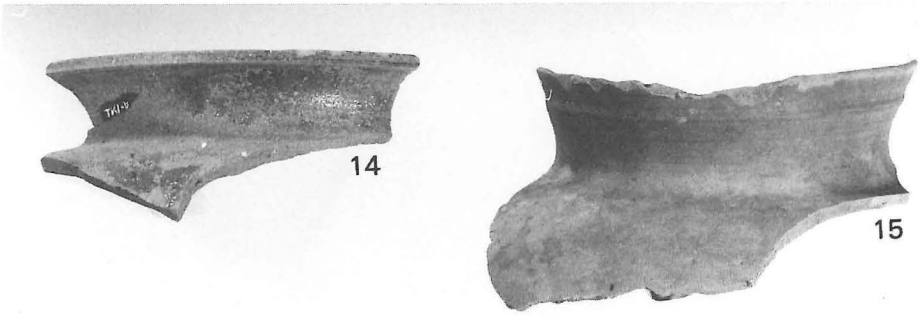
9

10

11

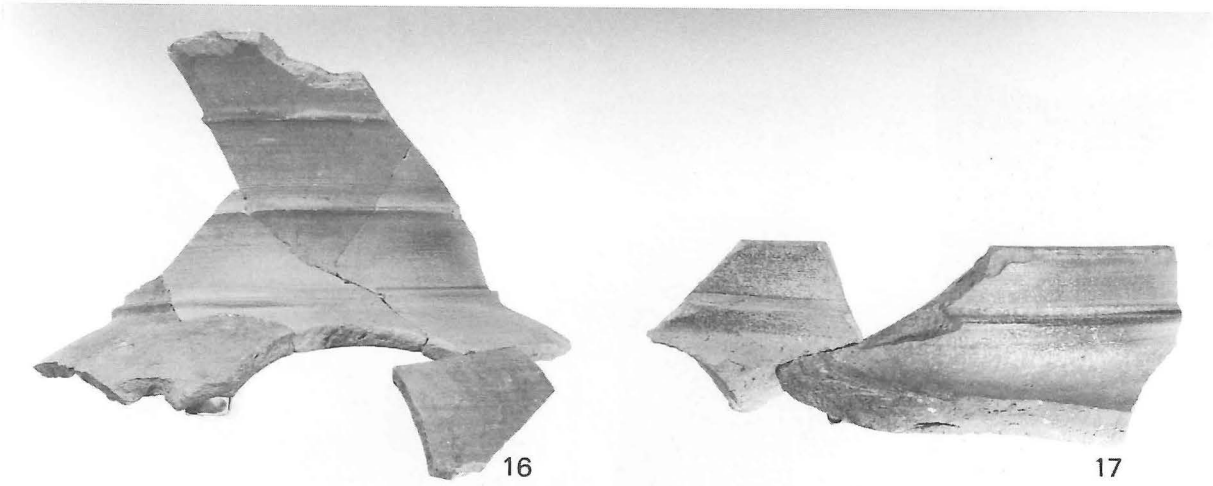
12

13


14

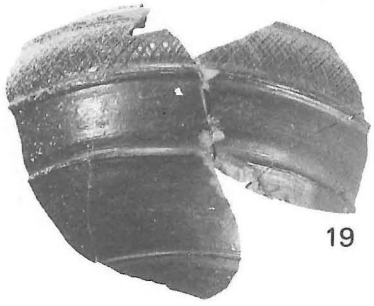
15

出土遺物（陶質土器・１）



16　17

18



19

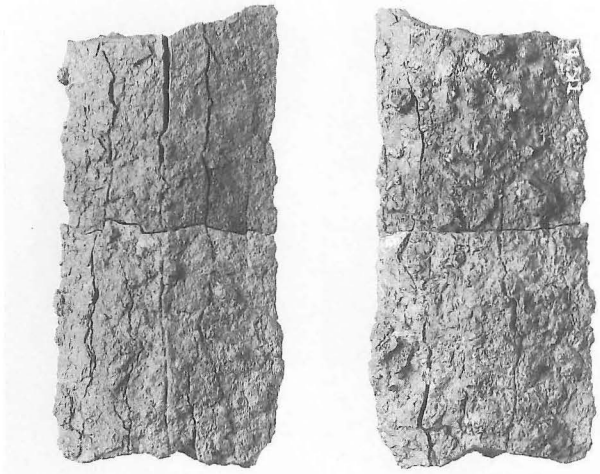
20

21

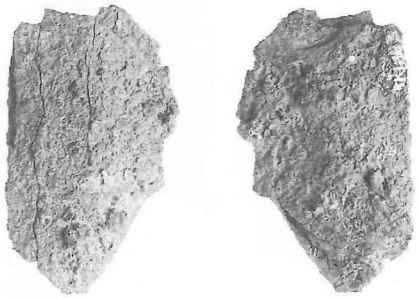
22

出土遺物（陶質土器・２）

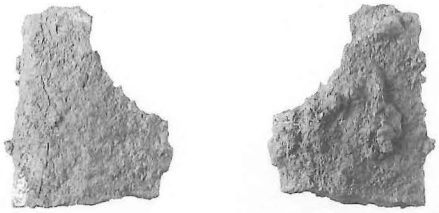
図版12



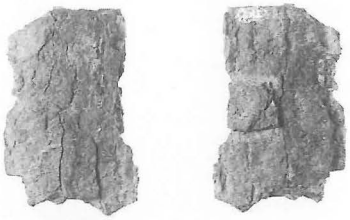
1



2



3

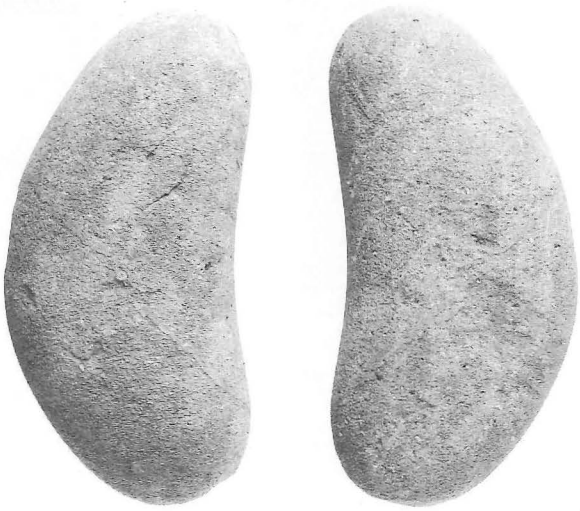


4

5

出土遺物（鉄器）

出土遺物（勾玉）



1

出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりがな	くわばるこふん
書名	クワバル古墳
副書名	長崎県下県郡豊玉町所在の古墳時代の墓地
巻次	1
シリーズ名	豊玉町文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編集者名	藤田和裕
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2番13号　電話095-826-5010
発行年月日	西暦　1998（平成10）年　10月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
くわばる　こふん クワバル　古墳	しもあがたぐん 下県郡 とよ　たま　ちょう 豊　玉　町 おおあざ　そ 大字　曽 あざ　くわばる 字　桑原	42443	14	34° 24′ 30″	129° 21′ 03″	19980511 ～ 19980522	約200m²	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
クワバル 古墳	古墳	古墳時代	箱式石棺	土師器 陶質土器 鉄器　勾玉	朝鮮半島系の遺物 多種

豊玉町文化財調査報告書　第6集

クワバル古墳

1998．10．30

発行　豊玉町教育委員会
〒817－1292
長崎県下県郡豊玉町大字仁位370番地

印刷　株式会社　昭和堂印刷